

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究は、中学校の国語教科書に長く採択されている太宰治の「走れメロス」を、従来あまり検討されてきていない明治初頭以来、欧米から移入され再話されてきた膨大な類話「メロス伝説」のネットワークの中に位置づけ、「走れメロス」を含む「メロス伝説」がそれぞれの時代・教育場において果たした役割を解明したものである。「走れメロス」をシラーの「人質」や国定教科書等の類話との関係を指摘した先行研究はこれまでも見られたが、それらは主として「走れメロス」の読解に資するためのものであり、ネットワーク科学を参考に、膨大な類話のネットワークを浮かび上がらせ、その中核となったテキスト（ハブテキスト）を特定し、それぞれの時代・教育場におけるそれらの役割と教育的意義を検証した研究はなく、その独創的なアプローチは国語教育研究にとどまらず、関連する近代文学研究の在り方等をも再考させるだけの意義を有している。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

まず筆者が「メロス伝説」と呼ぶ類話は、ギリシア・ローマを舞台とした伝説に始まり、中東イスラム世界や中世ヨーロッパにも広がりを見せていたもので、主要なモチーフと人物の役割や配列順序などが概ね一致するものを指し、本研究では、明治初頭に翻訳教材或いは英語教材として日本に紹介されたものを対象にしている。太宰治の「走れメロス」はそうした膨大なテキストのネットワークの先で創作されたものと言える。国語教育研究や近代文学研究において、「走れメロス」はネットワークの一部作品との類似性などが指摘され、それとの比較で読みの研究などが行われてきた経緯はあるが、(1)にも記したように、膨大な類話のネットワークの中で「走れメロス」を含むハブテキストの読みやその歴史的・社会的な意義と役割について体系的に分析した研究はこれまでにはなかった。その意味で国語教育研究という学問分野では新たな方法による試みとも言えるが、文学テキストが生成され、教材化され、そこで何が期待されていたかという国語教育研究における根本的な課題を考察するためには必要な手続きと言える。本研究は、国語教育研究にとどまらず、教育的な場における読み物教材（本研究では読書材）の意義と役割を研究する上で良き先達になるものと思われる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究では、1871（明治4）年～1960（昭和35）年にかけて日本で発行された雑誌・図書に掲載された「メロス伝説」を収集し分析した。先行研究も参考にしているが、それ以外にも、独自の調査によって新たに多くの類話を発見している。主に国立国会図書館のデジタルコレクションと国立教育政策研究所の教育図書館の蔵書を利用し、その総数は154件に及んでいる。

こうして収集した「メロス伝説」の整理・分類方法では、ネットワーク科学の知見を援用している。その発想は、個別の事象からは全体像の把握が困難なものについて、分析・考察し、その背景にある相互のつながりを浮かび上がらせる。本研究では、それぞれのテキスト内の記述内容を相互に比較するという実証的な方法が用いられ、丁寧かつ適切に分析されており、そ

こから浮上したネットワーク構造には確かな関係性を認めることができる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

上記の斬新で手堅い研究手法により、以下のような考察を行っている。

第一は、「メロス伝説」のネットワークをグラフ化し、その総体を可視化したことで、「多くの派生テキストを生み出すハブテキストが存在していたこと」「ハブテキストがネットワーク上で「世代交代」を行っていたこと」「1900年代～1930年代にネットワークが形成され、国民全体に浸透したこと」「メロス伝説」をハブテキストの系統別に時期区分ができること」「ハブテキストは一つの場合だけではなく領域を越えてリンクを広げていたこと」などを析出している。

第二は、各ハブテキストの読書材としての価値と伝播と受容の状況を明らかにしたことである。そこでは、道徳的な規範を示す規範感化材として、また西洋の文化を知るための言語文化財としての価値が認められたことを明らかにしている。

また、「メロス伝説」は、ネットワークが伝播・拡大するに従って西洋文化・精神を知る言語文化財としての価値は後景に退き、人間形成に資する規範感化材としての価値が前景化して、終局的には、「教育勅語」の「朋友相信」や「修養」の文脈に回収されていったことなどである。

第三は、「メロス伝説」総体との関係から「走れメロス」の意味を解明し、教育と国民性の問題等を指摘したことである。「走れメロス」では「信実の一貫困難性」が示され、従来の「メロス伝説」の利用価値を相対化していること。また「走れメロス」教材化は経験主義単元学習と文学教育が交差する転換期に行われ、「読むこと」の技術を高める「読む材料」としての扱いを受けつつ、一方で情操教育としての期待もかけられていたこと。そしてそこには戦前から引き継がれた自己犠牲の精神の再生産の構造が見られることなどを指摘している。

以上については、膨大な関連資料の丁寧な分析と考察に支えられており、斬新な発想ではあるが、学術的な水準としては、十分に従来の水準を超えたものと言える。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

すでに述べたように、本研究は、従来にない斬新な発想によりながら、膨大な資料の収集と分析については、従来以上に丁寧で手堅い方法によっており、その学術的意義は極めて高い。

「走れメロス」をネットワークの中でとらえることを通して、文学テキストの教材価値を歴史的な視座から議論することの重要性を示し、そのことによりテキスト内容だけでなく、日本の文化や国民性の問題として考えることの必要性を示唆している。

また「メロス伝説」という題材を切り口に教育の歴史を素描し、「メロス伝説」が英語、国語、修身、芸術、家庭・一般という広範囲の領域や場で用いられた読書材であり、それらの関係性について具体的な指摘ができた。

さらに「走れメロス」研究として、「メロス伝説」の中で「走れメロス」をテキスト相互の関係から歴史的意味を解明することで、新たな「走れメロス」理解を示すとともに、歴史の中に埋もれていた「メロス伝説」を発掘し、今後の「走れメロス」研究や文学教材研究を発展させる基盤を強化した。

最後に、ネットワーク科学の視点から物語を分析するという研究手法を用い、その有効性を実証した。この手法は個々のテキストやテキスト間の分析だけでは見えなかった複雑なテキスト相互の関係や伝播状況を浮き彫りにし、テキストのパワーバランスを再考し隠れていたテキスト、とりわけ従来の研究では対象外であった「フェイマスストーリーズ」のような大きな影響力をもつテキストの発見にもつながった。

以上は、斬新な発想のもとに膨大な資料を手堅い手法により実証的に分析した研究成果であり、国語教育学研究における教材史及び読むことの教育に関して顕著な成果と言え、博士（教育学）の学位にふさわしい論文であると評価できる。